

武道と禅

小川忠太郎範士

『稽古日誌』(二)

小川 心耕

昭和17年

3月19日 持田先生に願う。

引かず、左右にも転ぜず攻めて使う、手の内はひじを内に入れる。両刃交峰対峙、余出る、先生出る、不動。呼吸丈け約三十秒以上。先生小手を打ってくる。即、裏より攻めて小手、次に表より攻めて面、いずれも不十分。

但し余が石地蔵になっておるのは無にとらわれているのだ、単なる無で剣道の平常心是道が得られるなら誰でも名人になれる。剣道は無でもない、有でもない、真に不疑之道に徹する事だ。

次に近間で攻防、十分の技はどちらにもない、先生の得意の胴を一本打たる、一足一刀となると表にまわり面に伸びられる。

平常心に入るにはどこからはいるか。呼吸より入れ。それには少し無理だが両刃交峰、持田、齋村先生に願うては、一息裁断でゆけ。ここより調息より入る工夫をせよ。



小川忠太郎範士(昭和10年)

3月20日 持田先生に願う。

体は動こうが動くまいが問題ではない、動くべき時には動き動くべからざる時には動かぬ即平常心。

両刃交峰、余先生の裏にまわる、先生不動只照らしている丈、余表に合せ勝負を決せんと半歩攻む、そのあとは出られぬ、余の先が一寸暗くなったと思う時スーッと入り小手を打たる、又一足一刀余が攻めんとすると、この時は余の心気が胸にあがっている、初太刀とは異なる。形までには表われぬが肩はこり手の内は無理、気は引けている、ここにパッと気付く。

先ず自己統一、即息を止め（一息裁断死即禅也）、丹田充実、互角の心気となる。それから攻勢、拳攻め、先生は之に応ず、拳攻めよりは技は生まれぬ。

余は時々息を止めて腹力充実対峙。先生の技を応じ小手一本、先生参ったと言う。息を止め先生の出はなと感じて真面に伸びる、不十分だが先生は応じぬ。

その中、咄嗟の気ばたらきにて拳攻めのみでなく相手の水月を突く



持田盛二範士（『百回稽古』より）
写真提供：体育とスポーツ出版社）

如くスーッと入る、こう入ると余の体が大きくなる。一足一刀にて互いに攻め合い水月の突きより入り真面に伸びるとあたる、先生は足りぬという。

然しこれは自信ある技也、更に攻勢に出る、先生は引き気味、最後にもう一本で止めようと思うと気が留まる、先生より面に出る、之で終わり。

本日の真面は31の時、国専（注・国土館専門学校）で持田先生に願

しときの面也、11年ぶりで出た、非思量の技也。持田先生曰く、「今日の気分はよかったです、今日の使い方はよかったです、先がかかっている、今迄は自重し過ぎて気が引けすぎていた」と。

この太刀の生まれたのは禅のおかげだ、一息裁断の工夫のおかげだ、息をせぬ修行をしたのおかげ也。又この真面の技のヒントは早中（注・早稲田中学）の選手を置いて得たる技なり。

持田先生が下手を使うのを見ているとまず両刃交峰、相手は打とうとして左右にまわる、先生はジーッと照らしている丈（遠間）、しこうして機を見て半歩攻める、この時は真直ぐには入らぬ、右斜め前に進む。之で相手の中心を外すのだ。隙があれば技を出す、下がる時も真直ぐには下がらぬ、左後ろに退る。

斎村先生は両刃交峰、先ず左後ろに半歩退いて相手の中心を外す、隙あればかついで右斜め前に出て相手の面に伸びる。

余が持田先生の水月よりスーッと面に伸びた技は之は切り返しに於ける最後の面である、あのコツである、これ一本で死ぬ技也。

持田先生の言

試合で相手を知ることは之を気に留めてはいかぬ。重岡先生と試合した時N君が重岡さんなんか問題ではない。突きで攻めれば浮いてしまうと。自分も若かったからその言を聞き自重を欠き最初は小手をとり、次に何の事は無いと思ひ突を見せたら胴を打たれ、それから面に伸びられて負けてしまった。

近江佐久郎さんにも負けた。未だ助教時代で立ち上がりヤァーと声をかけねば気もはいらず技も出ぬ時代、そこを老巧者に見られたのだ。立ち上がると刀を一寸押えてニョロニョロと入ってくる、試合だから引かなければいかぬ、又ニョロニョロと入る、実に苦しんだ。勝負では勝ったがこんな苦しい試合はない、試合では負け、要するに自分の修行が足りないのだ。

もう一人岡山の某氏にも負ける、それは田舎人だし稽古をやってな

いという事を聞き相手を軽く見て敗る、自分の修行が足りないのだ。

12月5日 持田先生に願う。

前半...一足一刀に対す、先生が五寸攻める、そこで余の構えは死ぬ、結局頭がまとまらず自己の全力を發揮する事が出来なかった、乗られたのだ。

後半...一足一刀に対し、先生が五寸攻めると余は先ず引いて攻めてでる、すると頭もまとまり技も小手、或いは面に出てゆく。

前半は一つ勝でゆき後半は鐔割りでゆく。

12月6日 持田先生に願う。

前半...互いに相手を見る、余左右に開いて見るも入るべき隙なし、先生余の左小手を打つ、先生の攻勢に対し余は切っ先を下げ半歩引いて間をとる、之は打たれぬだけでここよりは先の技は生まれぬ。先生が攻勢勝ちだ。

後半...そこで考えをかえ一刀流の切り落とし突きのコツ（早切り返しの切り落した後の上太刀のコツ）で攻める、ここよりは技生まる、小手も面も或いは入って大きく冠って面技も。この技を七、八本出したが持田先生が出小手を打ったのは一本丈也。

前半は鐔割り、後半は早切り返しの切り落とし突き。

12月8日 持田先生に願う。

初めより気が満たぬ、心は真空、技は相手の切っ先を抑えスーッと入る、即一つ勝ちの理。両刃交峰、切っ先を抑えて入る、技は利かぬ、早切り返しの技は利くが之では先生の構えは破れぬ、精神的に二、三回追い込まれて打たる、之では剣道にならぬ。

12月28日 持田先生に願う。

呼吸は法定形、劍裡は一刀流五本までを反省す。

両刃交峰、先生は動かぬ、余は下段霞の理にて表と裏より抑えてみるが見えぬ、先生は下段より入り余の小手を打つ、近間で攻め合い面に伸びられる、余は二本目の形、即下段より拳攻め中段に乗らんとす、

余が下段に攻める所へスッと先生は入る、それと同じコツにて余が拳攻めより中段に乗らんとする時、余あるものを感じ思わず真面に伸びる、先生は参ったという、之は相打ちの技也、余が何物をか感じたのは先生が余の小手を打たんとしたのだろう、そこを相打ちの先で面を先取したのだ。

先生の切っ先を張り面又は胴に入ろうとしたが之は不成功、同じ気分の繰り返しとなるので止めた。

形と地稽古との一致の工夫は大切だ、之が事理一致の修行也。

12月29日 持田先生に願う。

昨日は近間で打たれたから、今一つは切先が高かったから、本日は遠間、切先を下げて願う。

両刃交峰、間合いの関係上互いに技が出ぬ。浮木でも下段からも先生の間に入れぬ。先生は余が打ったところを出小手をねらったり、すりあげ胴、遠間では片手突きのみ。余は入れぬ。余は冷えのため右肩が冷たくなる、技が伸びぬ、最後に先生の心気が勝りグーッと抑されて真面一本打たる。

そのあとでS君に願う。彼は技は自由。然し一足一刀のところでは余は彼の呼吸に先ず勝ち、技は拳攻めで相手の構えを破る。浮木で入ると彼は技を出す。それを余は応じて打つ。故に知る、剣の技は器用でも程度がある。

余とS君との差は呼吸だ。又、余と持田先生との差も呼吸だ。これは鍛錬工夫の外無し。

呼吸とは一息也、息を止めること。これは気合い。動くべき時には動き、動くべからざる時は動かぬ、これは間合い。

12月31日 持田先生に願う。

(一息と近間に入ることを主にす。)

両刃交峰、余は霞にて表裏より見る。先生は片手突きにて牽制す。余は二本目の形にて近間に入ろうとするが入れぬ。先生もよい技が出

ぬ。

その中余の切っ先負け眼先がチラチラス。之ではいかぬと先生の切っ先を払おうとしたがそうでなく早切り返しの切り落とし突きにて突っ込む。チラチラは消える。互いに思う技が出ぬ。

余三本目鐔割りの足（引いて出る）にて攻める、之はだめ。切り落とし突きにて面に伸びること三四回、皆先生は受ける。切り落とし突きより小手、軽くも二三本当たる。

それは先生が受けようとするからだ。胴に入ったが不十分、最後に攻められ近間で小手を打たる。

持田先生と一足一刀に対し浮木及び下段即傍から入ったのでは入れぬし入ってもそれは技にかかわらぬ。切り落とし突きか或いはスーッと先生の水月に真直ぐに攻めて入った切っ先は同時に技に変化できる。即、すなおな心は技に変化出来る。

剣道の稽古は試合をやる以上に真剣に前後の工夫をする事が大事だ。それでないと自得はない。縁はあっても悟れぬ。

（つづく）

著者プロフィール



小川心耕（本名/昭）

昭和10年、東京生まれ。慶応大学経済学部卒。明治生命勤務。在職中に清和剣友会（巣鴨）創設、少年剣道指導に当たる。定年退職後、（財）ダイヤ高齢社会研究財団認定エアロビック・インストラクターとして高齢者の健康・生きがいづくりに従事。平成22年、人間禅丸川春潭老師に入門。